

【 復活のトロパリ 第4調 】

しゅのおんなで しは ふくかつのひかるおと
 主 女 弟 子 は 復 活 光 音
 づれを てんしよ り き き う け て、
 天使 聞 受
 げんそよりの ていざいをふる いすて、しと
 原 祖 定 罪 振 棄 使 徒
 にほこりてい え り、しはほろぼさ
 誇 日 死 滅
 れ、ハリストスか みはふくか つして、せかいに
 神 復 活 世 界
 おおいなる あわれみをたま え り。
 大 憐 賜

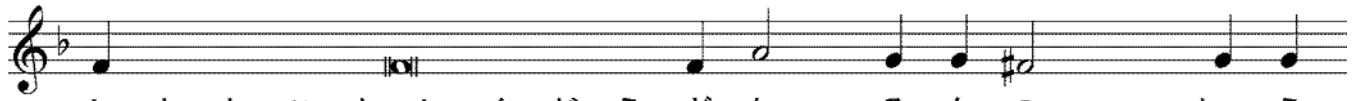
【 生神女就寝祭のトロパリ 第1調 】

しよ うし んぢよ よ、なんぢは うむと き どう てい
 生 神 女 爾 産 時 童 貞
 をまも れ り、ねむる と き せかいをのこさ
 守 寝 時 世 界 遺
 ざりき。な あんぢは いのちのははとし
 爾 あんぢは いのちの はは とし
 ていのち にうつれ り、なんぢのきとうを
 生 命 移 爾 祈 禱
 もって われらのたましいをしよりのがれし
 以 我 等 靈 死 脱

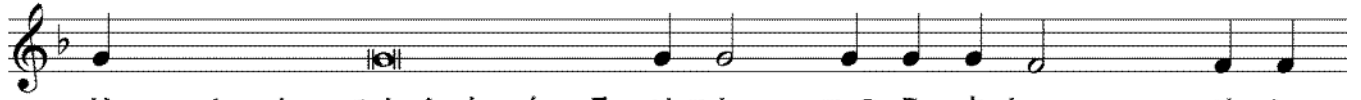


めたも お う。
給

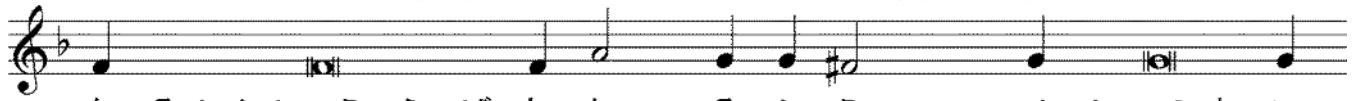
【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】



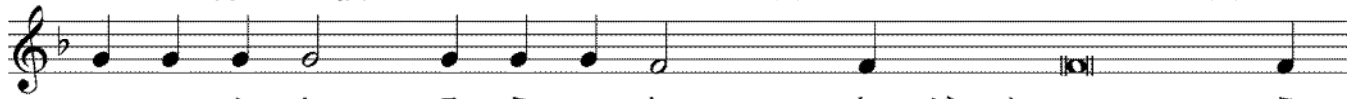
し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ちゅう
使 徒 等 同 座 者 忠



じ つ に し て しん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
實 神 智 役 者 聖



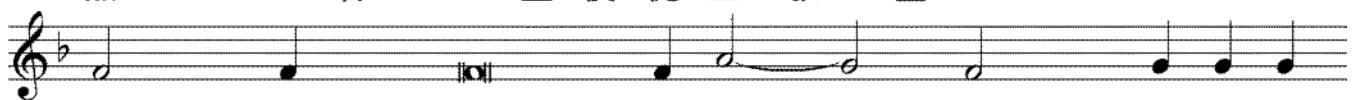
な る しん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い
神 撰 笛 愛



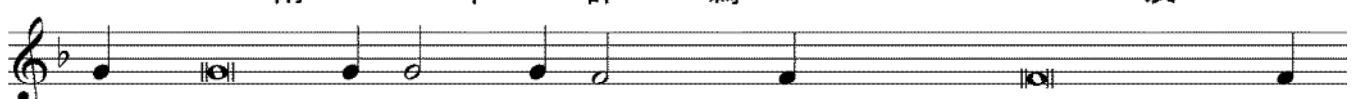
に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
満 器 我 國 光



し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
照 者 亜 使 徒 主 教 聖



よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び
爾 羊 群 爲 及

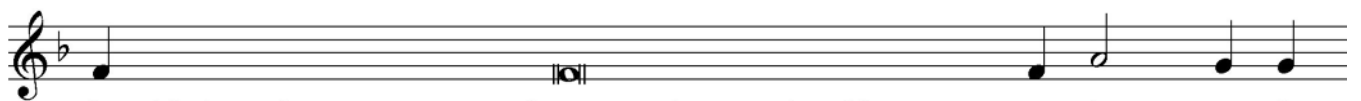


ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
全 世 界 爲 生 命 賜 聖

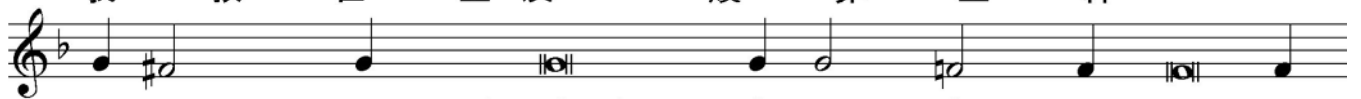


さん しゃ に い の り た ま え 。
三 者 祈 給

【 復活のコンダク 第4調 】



わ が き ょ う せ い し ゆ お よ び し ょ く ざ い し ゆ は か み と
我 救 世 主 及 贖 罪 主 神



し て 、 ち に う ま れ し も の を か せ よ り
地 生 者 を 桎 梏

と き て 、 は か よ り ふ く か つ せ し め 、
 釋 墓 復 活

ぢ ご く の も ん を や ぶ り て 、 し ゅ さ い と し て
 地 獄 門 破 主 宰

み っ か め に ふ く か つ し た ま え り 。
 三 日 目 復 活 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

せ い せ い しゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

く に な ん ぢ を た び び と お よ び い ほ う じ ん と う け
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 な ん ぢ は は じ め わ が く に に お い て お の
 爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い しゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト ス の
 外 來 者 知

ひ か り と あ た た か き を な が し 、 な ん ぢ の て
 光 暖 流 爾 敵

き を ぞ く し ん の こ と な あ し 、 か れ ら に か
 屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 生神女就寢祭のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 きとうにねむらざるしようしんぢよ、てんたつに
 祈 禱 眠 生 神 女 轉 達
 かわらざるたのみなるものおを、ひつ
 變 倚 望 者 枢
 ぎとしとはとどめざりいき、けだし
 死 留 蓋
 えいていどうぢよのたいにいりしものお
 永 貞 童 女 胎 入 者
 はかれをいのちのははとしていのちに
 彼 生 命 母 生 命



う つ し た ま え り 。
移 給

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

ねがものちえめいごとあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔

を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と

なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

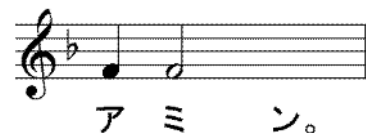
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

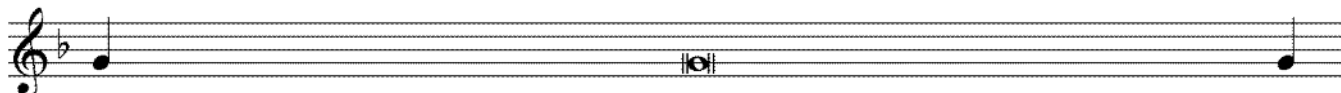
司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、

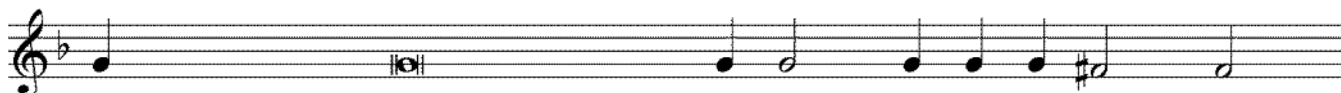


ア ミ ン。

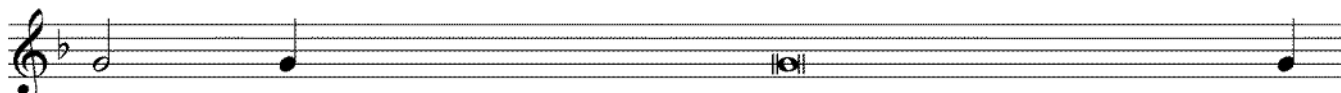
【 聖三祝文 】



せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖



じょう せいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐



よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもよ、われらをあわれ
常生者我等を憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖神聖勇毅
せいなるじょうせいのもよ、われらをあわ
聖常生者我等を憐
れめよ。こうえいはちとことせいしん
光榮父子聖神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸今何時世世
せいなるじょうせいのもよ、われらをあわ
聖常生者我等を憐
れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖神聖勇
き、せいなるじょうせいのもよ、われらを
毅聖常生者我等を
あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第4調 及び生神女の歌 第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅ} プロキメン、^{なんぢ} 主よ、^{しわざ} 爾の工業は何ぞ^{なん}多^{おお}き、^{みなちえ} 皆智慧^{もつ}を以て^{つく}作り、

しゅ よ 、 なんぢの しわざ は なんぞ おお き 、
主 爾 工業 何 大
みなちえを も っ て つく れ り 。
皆 智慧 以 作

誦經) ^わ 我が ^{たましい} 靈よ、^{しゅ} 主を讃め^ほ揚げよ、^{しゅわ} 主我が神よ、^{なんぢ} 爾は^{いた}至りて^{おおい}大なり、

しゅ よ 、 なんぢの しわざ は なんぞ おお き 、
主 爾 工業 何 大
みなちえを も っ て つく れ り 。
皆 智慧 以 作

誦經) ^わ 我が ^{たましい} 靈は^{しゅ}主を崇め、^わ 我が^{しん}神は^{かみわ}神我が^{きゅうしゅ}救主を^{よろこ}悦べり。

わ が た ま し い は しゅ を あ が め 、 わ が し ん は
我 靈 主 崇 我 神
か み わ が きゅうしゅを よろこべり 。
神 我 救 主 悦

【 ^{アポストロス} 使徒經 166 端 コリント前書 16 章 13~24 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん}コリント人^{たつ}に達する^{ぜんしょ}前書^{よみ}の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて^き聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{なんぢら} 爾等^{けいせい} 傲醒せよ、^{しん} 信に立て、^た 勇め、^{いさ} 堅固なれ。^{けんご} 凡の事^{およそ} 愛を以て^{ことあい} 行え。^{もつ} 兄

^{てい} 弟よ、^{いえ} ステファンの家^{はつもの} はアハイヤの^{かつおのれ} 初實にして、^{せいと} 且己を^{つと} 聖徒に^{ささ} 務むることに^{けい} 獻げしは、

^{なんぢら} 爾等の^し 知る^{ところ} 所なり、^{われなんぢら} 我爾等に^{もと} 求む、^{なんぢら} 爾等も^か 此くの^{ごともの} 如き者、^{およ} 及び^{およ} 凡そ^{じよりよく} 助力する^{もの} 者

と、勤^{きんろう}勞する者^{もの}とに服^{ふく}せよ。我^{われ}はステファン、フォルトウナト、及びアハイクの來^{きた}りしを喜^{よろこ}
ぶ、彼^{かれ}等は我^{われ}が爲^{ため}に爾^{なんぢら}等の缺^かくる所^{ところ}を補^{おぎな}えり、蓋^{けだし}彼^{かれ}等は我^{われ}と爾^{なんぢら}等との心^{こころ}を安^{やす}
じたり。此^かくの如^{ごと}き者^{もの}を敬^{うやま}え。アシヤの諸^{しよきようかい}教^{なんぢら}會^{あん}は爾^と等の安^{およ}を問^おう。アキラ及びプリ
スキラは、其^{その}家^{いえ}の教^{きようかい}會^{とも}と偕^{しゅ}に、主^あに在^{せつ}りて切^{なんぢら}に爾^{あん}等の安^とを問^{しゅうけいてい}う。衆^{なんぢら}兄^{あん}弟^と爾^{しゅ}等の安^{あん}を
問^とう。爾^{なんぢら}等聖^{せい}なる接^{せつ}吻^{ぶん}を以^{もつ}て互^{たがい}に安^{あん}を問^{われ}え。我^{われ}パヴェル手^てづから爾^{なんぢら}等の安^{あん}を問^{しゅ}う。主^{しゅ}
イススハリストスを愛^{あい}せざる者^{もの}は「アナフェマ」たるべし、「マラン、アフア」。願^{ねが}わくは我^{われ}等
の主^{しゅ}イススハリストスの恩^{おん}寵^{ちよう}は爾^{なんぢら}等と偕^{とも}に在^あらんことを。我^{われ}が愛^わもハリストス イス
スに於^{おい}て爾^{なんぢら}等衆^{しゅうじん}人^{とも}と偕^あに在^あるなり、「アミン」。

(比較用 口語訳)

目をさましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく、強くあつてほしい。いっさいのことを、愛をもつて行いなさい。兄弟たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたが知っているように、ステパナの家はアカヤの初穂であつて、彼らは身をもつて聖徒に奉仕してくれた。どうか、このような人々と、またすべて彼らと共に働き共に労する人々とに、従つてほしい。わたしは、ステパナとポルトナトとアカイコとがきてくれたのを喜んでいる。彼らはあなたがたの足りない所を満たし、わたしの心とあなたがたの心とを、安らかにしてくれた。こうした人々は、重んじなければならない。アジアの諸教会から、あなたがたによろしく。アクラとプリスカとその家の教会から、主にあつて心からよろしく。すべての兄弟たちから、よろしく。あなたがたも互に、きよい接吻をもつてあいさつをかわしなさい。ここでパウロが、手づからあいさつをしるす。もし主を愛さない者があれば、のろわれよ。マラナ・タ(われらの主よ、きたりませ)。主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。わたしの愛が、キリスト・イエスにあつて、あなたがた一同と共にあるように。

【 アポストロス 使徒經 240 端 フィリピ書2章5節~11節 】

誦經) 兄^{けいてい}弟^{なんぢら}よ、爾^{こころ}等はハリストス イススの意^{もつ}を以^{こころ}て意^{かれ}とすべし。彼^{かみ}は神^{かたち}の像^{ひと}にして、
神^{かみ}と匹^{ひと}しくなることを 僭^{ひとご}うとせざりき、然^{しか}れども己^{おのれ}を虚^{むな}しくして、僕^{ぼく}の貌^{かたち}を受け、人^{ひと}
と同一^{おな}き者と爲^{もの}りて、外^{がい}形^{けい}に於^{おい}て人^{ひと}の如^{ごと}くなり、己^{おのれ}を卑^{ひく}くして、死^しに至^{いた}るまで 順^{したが}い、
且^{かつ}十^{じゅう}字^じ架^かの死^しに至^{いた}れり。故^{ゆえ}に神^{かみ}も彼^{かれ}を無^{むじょう}上^{たか}に高^{たか}くして、彼^{かれ}に凡^{およそ}の名^なに超^なゆる名^なを賜^{たま}
えり、凡^{およ}そ天^{てん}に在^あり、地^ちに在^あり、及^{およ}び地^ちの下^{した}に在^ある者^{もの}の膝^{ひざ}は、イイススの名^なの前^{まへ}に屈^{かが}み、且^{かつ}
凡^{およそ}の舌^{した}はイイススハリストスが主^{しゅ}たるを承^うけ認^みめて、光^{こう}榮^{えい}を神^{かみ}父^{ちち}に歸^きせん爲^{ため}なり。

(比較用 口語訳) キリスト・イエスにあっただいしているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かさない。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

【 アリルイヤ 主日第4調 及び生神女就寝祭の 第2調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんべい せいちよく けんべい} 神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ なんぢおよ なんぢ のうりよく ひつ なんぢ あんそく ところ た} 主よ、爾及び爾が能力の匱は爾が安息の所に立てよ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんと ふくいん おしえ さと たま わ うち なんと ふく いましめ}の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんと よろこ ところ}畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんと わ たましい からだ こうしょう われらなんと なんと むげん ちち しせいしぜん}爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんと しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン}福音經 マトフェイ福音書87端 21章33~42節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い かしゅ ぶどうえん う これ まがき}謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、家主あり、葡萄園を植え、之に籬を

^{めぐ そのうち さかぶね ほ ものみ た これ えんてい たく たほう ゆ みのりどきちか}環らし、其中に酒榨を掘り、塔を建て、之を園丁に託して、他方に往けり。果斯近

^{かれ そのみ おさ ため しょぼく えんてい つかわ えんてい そのぼく とら}づきたれば、彼は其果を收めん爲に、諸僕を園丁に遣ししに、園丁は其僕を執えて、

^{あるもの う あるもの ころ あるもの いし う またた ぼく さき おお つかわ これ}或者を打ち、或者を殺し、或者を石にて撃てり。復他の僕を先より多く遣ししに、之

^{か ごと おこな つい おのれ こ かれら つかわ い わ こ は しか}にも是くの如く行えり。遂に己の子を彼等に遣して曰えり、我が子に愧ぢんと。然れど

^{えんてい こ み あいかた い こ よつぎ ゆ くれ ころ そのしぎょう と}も、園丁子を見て、相語りて曰えり、此れ嗣子なり、往きて、彼を殺して、其嗣業を取ら

^{すなわちかれ とら ぶどうえん そと ひ い ころ しか ぶどうえん しゆきた とき}ん。乃彼を執えて、葡萄園の外に曳き出だして殺せり。然らば葡萄園の主來らん時、

^{なに こ えんてい おこな かれらいわ こ あ もの なさけ ほろぼ ぶどうえん もつ た}何をか此の園丁に行わん。彼等曰く、此の悪しき者を情なく滅し、葡萄園を以て他

えんてい すなわちとき およ かれ み おさ もの たく かれら い なんぢら せい
の園丁、即時に及びて彼に果を収めん者に託せん。イイス 彼等に謂う、爾等は聖

しょ こうし す いし おくぐう しゅせき な こ しゅ な ところ われら め き
書に、工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり、此れ主の爲す所にして、我等の目に奇

い い いま かつ よ
異なりとすと、云うを未だ嘗て讀まざりしか。

(比較用 口語訳)

ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか。彼らはイエスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。イエスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』」。

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 54 端 10 章 38～42 節、11 章 27～28 節 】

か とき かれら ゆ とき ひとつ むら い あるおんな な もの
司祭) 彼の時、彼等が行ける時、イイス 一の村に入りしに、或 婦 マルファと名づくる者、

かれ そのいえ むか そのしまい な もの そくか ぎ そのことば
彼を其家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イイスの足下に坐して、其言

き きょうじ おお よ ころ わづら つ い しゅ わ しまい
を聴けり。マルファは 供事の多きに因りて心を煩わし、就きて曰えり、主よ、我が姉妹、

われひとり のこ きょうじ なんぢい な これ めい われ たす
我一人を遺して 供事せしむるを 爾意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。イイ

かれ こた い なんぢ おお こと おもんばか ころ ろう
スス彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を 慮りて心を勞せ

しか もと ところ ひとつ よ ぶん えら これ かれ うば べ
り、然れども需むる所は 一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪う可から

これ い とき ひとり おんたみ うち こえ あ かれ い なんぢ はら はら なんぢ
ず。此を言う時、一の 婦民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾を孕みし腹と 爾

す ち さいわい かれ い しか かみ ことば き これ まも もの さいわい
が嘯いし乳とは 福なり。彼は曰えり、然り、神の言を聴きて之を守る者は 福なり。

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心をとりにみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっし

やってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③（金口イオアン聖体礼儀）へ